

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

## 5歳児3学期の行事への取り組みにとらえる「協同的な学び」：子どもたちを支える保育者の援助

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 志村 聡子, 篠原 直美, 廣瀬 由起子, 成川 陽平, 石川 悦子  |
| 雑誌名 | 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇   |
| 巻   | 7   |
| ページ | 115-126   |
| 発行年 | 2007-12-01  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000846/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000846/</a> |



# 5歳児3学期の行事への取り組みにとらえる「協同的な学び」

— 子どもたちを支える保育者の援助 —

Collaborative Learning of Kindergarten Children in Activities for the Event

志村聡子\*・篠原直美\*\*・廣瀬由起子\*\*・成川陽平\*\*・石川悦子\*\*

SHIMURA Akiko, SHINOHARA Naomi, HIROSE Yukiko

NARIKAWA Youhei, ISHIKAWA Etsuko

## はじめに

近年、幼児期における「協同的な学び」に関する論稿が多く発表されている<sup>1</sup>。この「協同的な学び」は、就学を翌年に控えた5歳児（年長児）の活動において見出されることが多く、その背景には、就学前教育（幼稚園での教育、保育所での教育をともに含む）と小学校教育との連続を実現しようとする関心の深まりがある。さらにまた、他者との関係づくりや他者との関係を基盤とする「学び」への期待もある。

2005年1月に出された中央教育審議会の答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」<sup>2</sup>では、「協同的な学び」について「幼稚園等施設において、小学校入学前の主に5歳児を対象として、幼児どうしが、教師の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動」と位置付け、「その取組を推奨」している。答申を受けて同年発行された『幼児期から児童期への教育』では、5歳児の「協同的な学び」について詳述している<sup>3</sup>。

この「協同的な学び」の推奨は、5歳児のあり方について関係者に理解を促すこととなり、各所で「協同的な学び」を実現しようと試みがなされるようになった。しかし、岩立京子が「表面的な形式としての協同、見せかけの協同、強いられた協同に止まっているのではないかと感じることもある」と指摘しているように<sup>4</sup>、その活動の質を問う反省的な視点も欠かせない。関係者には、積極的に実践報告を公開し、互いに検討を重ねて、5歳児の「協同的な学び」を成立させる援助について考察を深めていくことが望まれよう。本稿は、独自の実践記録を公開することで、5歳児の「協同的な学び」に関する研究に貢献することを志向している。

本稿では、埼玉県内のある私立幼稚園5歳児の活動（平成18年度）をとりあげる。同園では卒園を目前にした3学期に、毎年保護者を招いた行事を行うことが恒例になっている。同園の当該年度5歳児3学期の行事への取り組みを通して、保育者らが行った援助を明らかにするとともに、子どもたちにおける成長（「学び」）のありようを明らかにしたい。

なお、執筆者として名を連ねる篠原・廣瀬・

キーワード：5歳児、幼稚園、「協同的な学び」援助

Key words : 5 year-old children, Kindergarten, Collaborative Learning

成川は、実践を行った担任保育者であり、石川は、同幼稚園の園長として実践を支援した。志村は、保育者養成に携わる大学教員であって、その実践を観察し、保育者らと懇談して議論を重ねてきた。本稿の執筆は志村によるもので、観察と保育者らとの議論に基づく内容は【概要】として記述した。【観察者による考察】部分については、観察者による解釈を多分に含んだ記述となっている。

まず、次節において、園や行事についておおまかな情報を伝える。次に、当該年度の活動として、グループ分けの方法と2つのグループの展開を記述する中で、保育者による援助と子どもたちの「学び」を明らかにする。

### 1. 幼稚園の概要と5歳児の行事「さんかんび」のなりたち

本幼稚園は、キリスト教主義を掲げる私立幼稚園で、創立から四十年を数えている。例年、3歳児クラス1～2・4歳児クラス2～3・5歳児クラス2で推移してきている中規模の幼稚園で、比較的静かな住宅地に隣接している。バス通園は行っていないが、いわゆる預かり保育を実施するとともに、給食は週2回利用することができるなど、保護者の便宜を図っている。保育時間は8時30分から2時までを基本とし、その後は任意で預かり保育を実施している。

5歳児の3学期、幼稚園生活の集大成として保護者に保育を公開することは、毎年の恒例行事である。この行事が行われるようになった時期や経緯については、記録が残っていないため不明である。ちなみに、約二十数年前、篠原と志村が本園において保育者として勤務した折、すでにこの行事は毎年恒例となっていた。当時は、「おみせやさんごっ

こ」と呼ばれ、クラスごとの公開となっていた。その後、ものを売る「おみせ」だけでなく、合唱・合奏や劇の披露、ゲームなど、物品のやりとりを介さないサービスの提供も行われるようになって、「おみせやさん」でなく「さんかんび」へと呼称も変化したものと考えられる。クラスの枠を取り払って学年全体で取り組むなど、各年度の創意工夫によって活動形態は変化を遂げてきたが、ともあれ、長きにわたり行われてきた本園の伝統行事である。

本稿で取りあげるのは、平成18年度（2006年度）の5歳児の取り組みで、期間としては平成19年1月11日から2月8日までである<sup>5</sup>。この学年は2つのクラス（つきぐみ、ほしぐみ）から構成されていた（計77名）。女兒23名と男児19名の計42名から成るつきぐみを篠原（保育経験23年目、当時。女性）と成川（保育経験3年目、当時。男性）が担任し、女兒17名と男児18名の計35名から成るほしぐみを廣瀬（保育経験16年目、当時。女性）が担任した。この年の4月から、クラスの枠にとられない活動形態を模索することとし、それぞれ週1回行われる体育の時間とリトミックの時間は、学年を3つのグループに分け、それぞれのグループに保育者が1人ついて援助を行った。そのほか、大きな行事（お泊り保育、運動会、クリスマス会）でも、学年全体で多様なグループ編成を行い、3人の保育者がグループごとの対応を行った。通常、子どもたちは各クラスの保育室で過ごす。体育の時間やリトミックの時間に対応したグループ、さらに行事に応じたグループと、機会に応じた集団に属して行動した。

こうした多様なグループ編成を試みる理由として、子どもたちの数に対応して3人の保育者を配置して3つの保育室を確保すべきと

ころ、それを果たせないという施設設備に関する物理的な事情があった。ただ、出発点にはそうした消極的な事情があったとはいえ、こうした取り組みを通して、5歳児担当の3人の保育者たち（以下、保育者たち）は子どもたちの育ちに手ごたえをとらえていた。今回とりあげる3学期の「さんかんび」でも、クラスの枠を取り払い、学年全体でグループ編成を行うことにした。

## 2. 「さんかんび」の始点一個のこだわりを尊重したグループ編成をめざして

### 【概要】

1月11日（木）に、学年全員の子どもたちを集め、保育者たちは2月8日（木）に参観日（以下、さんかんび）があることを伝え、どんなことをしたいか考えておくよう話した。翌日の12日（金）に再度全員の子どもたちを集め、さんかんびに何をしたいか発言を促した。子どもたちの発言は、「サッカー」や「クッキー」などの単語で記録された。

保育者たちは、子どもたちが降園したあとにグループ編成や今後の援助計画について話し合い、すべての発言をふまえて6つのテーマを掲げることにした。やきいも・ケーキ・パン・クッキー・ピザ・やおや・たこやき・おにぎり・ラーメンは、「たべもの」グループに包括することにした。サッカー・ボーリング・UFOキャッチャー・電車・パチンコ・ビンゴ・ももたろう・はねつきは、「ゲーム」グループに包括することにした。パーマ・ゆびわ・ようふく・とけい・リボン・ぼうし・めがねは「おしゃれ」グループとして括ることにした。きょうりゅう・おぼけ・もり・うみは「めいろ」グループとして括り、かみしばい・うたを「げきじょう」グループに、はな・お

りがみ・おみくじ・マッサージ・ペット・ゆびんきょくを「おみせ」グループとして括ることにした。こうしたグループ分けの根拠は、発言の背景への配慮とともに、人間関係と活動の展開に関する予想をふまえている。

1月15日（月）、保育者たちは、子どもたちに、今後6つのグループに分かれて活動することを提案し、その理由や構想について説明した。どの子どもの発言も、6つのグループのいずれかに振り分けられているが、あらためて6つのどのグループに入るかを選ぶよう告げ、以前の自分の発言から離れてグループを選ぶことも可とした。ほとんどの子どもが参加するグループを決めていく中、5人の子どもたちが納得できず、グループを決められなかった。その5人に対しては、保育者たちが個別に話し合いをすることにした。

おりがみをやりたいA（女児）に話を聞くと、折り紙をする活動についてはイメージが浮かんでも、グループに属してそれを行うことに納得がいかないようだった。話し合ううち彼女は納得し、もとは「おみせ」グループに属する案が提示されていたが、「おしゃれ」グループで活動することになり、保育者は経過を見守ることにした。マッサージをやりたいBとC（ともに男児）は、「おみせ」グループに属することに納得していなかったが、話し合ううち、「げきじょう」グループで、上演の休憩にマッサージをすることになった。ゆびんきょくをやりたいDとE（ともに男児）も、「おみせ」グループに属することや、大きなお店の中にゆびんきょくが開設されるというイメージに納得しなかった。しかし、話し合うことで、「おみせ」グループでなく「ゲーム」グループに属し、「お店の中にゆびんきょくがある」のではなく、「ゲームセンター

の横にゆうびんきょくがある’ というイメージで二人の納得を得ることができた。

最終的に、6つのグループは、「ゲーム」「たべもの」「おしゃれ」「げきじょう」「めいろ」「ペットショップ」となり、子どもたちはそれらの6つのグループのうち、いずれかに属しながら活動することになった。翌16日（火）に、グループごとに顔合わせを行い、どんなことをやっていきたいか、どんなものが必要かを話し合った。

保育者の分担としては、「ゲーム」と「たべもの」を廣瀬、「おしゃれ」と「げきじょう」を篠原、「めいろ」と「ペットショップ」を成川が担当することになった。子どもたちの人数構成は、「ゲーム」が13名（女兒1名、男児12名）、「たべもの」が13名（女兒8名、男児5名）、「おしゃれ」が17名（全員女兒）、「げきじょう」が12名（女兒5名、男児7名）、「めいろ」が14名（女兒3名、男児11名）、「ペットショップ」が6名（女兒3名、男児3名）であった。必ずしも均等な配分とはいえないが、どのグループにもつきぐみとほしぐみの子どもがともに属する形となった。

#### 【観察者による考察】

幼稚園に保護者が来訪するということは、子どもたちにとって無条件にうれしいことのように、そのことはまず子どもたちの意欲を引き出すのに効果的だ。ただ、「おかあさんが来てくれてうれしい」ということにとどまらず、「おかあさんに喜んでもらう」「楽しんでもらう」というように、来訪者の立場にたつことを求めたことは、この時期の子どもたちに適切な課題であると理解した。

また、まず子どもたち一人一人がやりたいことを発言する活動は、子どもたちの意欲を

引き出すことに意味があると思った。しかし、篠原によれば、子どもたち一人一人の活動への意欲は一樣ではないので、やりたいことを発言する話し合いのとき、一人一人の意欲を見取るようにしたという。そして、発言している子どもだけでなく、話し合いに集中していない子どもに配慮するとともに、司会でない保育者にこっそり耳元で意見を言う子どもについても認めるようにしたとのことだった。元気に発言する子どもがいる一方で、大人数の前で発言することに臆してしまう子どももいる。考えが浮かばず、誰かの発言を聞いて同様の発言をする子どももいるだろう。5歳児と言っても一人一人の姿はさまざまであることをふまえ、保育者たちは意欲を引き出すために個々に応じた関わりを行っていた。

「やってみたいことをやろう」という目標だけでなく、「力をあわせてやろう」という目標を子どもたちに提示したことも重要である。その二つを達成するために、保育者たちは、6つのグループ構成について構想した。そして、保育者は子どもたちに6つのグループを示すとともに、その活動構想を発表した。グループの構想を保育者から聞いて、子どもたちは属するグループを選んだ。この際、当初の発言から離れて、あらたにグループの魅力にひかれてそれを選んだ子どももいたようだ。ともかく、そのような一連の手続きによって、子どもたちのこだわりを尊重しつつ、協同するための素地が用意された。一人一人の考えを尊重する一方で、友達との出会いも演出する、心憎い援助である。

子どもたちに6つのグループを提示したとき、すんなりと受容した子どもが多かった一方で、納得しがたい子どもがいたことも見逃せない。このように、協同する中で個のイメー

ジが変容を迫られる局面がある。子どもがそうした葛藤を乗り越えるよう、保育者はその姿を見守る必要がある。

ところで、1月12日の夕刻に幼稚園を訪問し、保育者たちの話し合いに参加したとき、廣瀬が「子どもたちから‘レストラン’がまだ出てこない」と言っていた。「ごちそう」や「バイキング」、「たべものをつくる活動」や「メニュー」についての発言は子どもたちから出ているが、それらを「レストラン」で括ることについて、保育者が先んじて提案することはしないでおきたいという。6つのグループの構想発表で、一つは「たべもの」グループとし、あえて「レストラン」という言葉を出さず、子どもたちから「レストラン」という言葉が出てくるのを待つと廣瀬は話していた。後日、「たべもの」グループは「レストラン」グループに名前を変えた。「ここ、レストランだね」と気づいて発言した子どもの心はずむ思いが想像される。

廣瀬がその場を「レストラン」であると子どもたちに先んじて伝えるのではなく、子どもの気づきを待っていたというエピソードは印象的である。子どもたち自身が活動の流れを創っていく部分を保障するとも言えるし、その場を「レストラン」であると指摘する子どもは皆から認められるだろう。「レストラン」の発言が子どもから出るのを待つと話す廣瀬は、楽しそうだった。

こうして、6つのグループに分かれて、子どもたちは活動を開始した。限られた紙幅の関係から、「げきじょう」グループと「たべもの（レストラン）」のみをとりあげるものとする。

### 3. 「げきじょう」グループにおける援助と「協同的な学び」

#### 【概要】

「げきじょう」グループは、「げき」「うた」「マッサージ」と発言した子どもたちが集まって構成された。日々の活動においては、おのおのが活動に取り組んだあと、12名がそろって話し合いをして、その日の活動内容や次の日の活動内容について確認し合った。

「げき」は、もともとF（女児）の発案がきっかけとなっている。さんかんびにやりたい活動を発言したとき、Fは「自分のつくったお話をげきにしたい」と言った。Fは普段から絵本や紙芝居を作ることが好きなので、篠原はそうした彼女の発想を大切にしたいと考えていた。その後、6つのグループを選ぶ折、「げき」をやりたいと言う子どもがFしかいなかったため、篠原はFに「げきは1人ではできないね、誰かさそってみたら」と投げかけた。すると、Fの誘いに応じて同じつきぐみの3人の女児（G、H、I）がともに活動することになった。

その後、「げき」をやりたいという意見が、かみしばいをやるという案に変わった。Fは自筆でお話を書いたノートを、自宅から幼稚園に持ってきていた。そして、Fのつくったお話をもとに、女児たちが紙芝居を場面ごとにわけて構成し、下絵を描いた。これにはフリーの保育者が援助したが、子どもたちだけで意欲的に進める姿に感心したという。

ある日、篠原も交えた話し合いの中で、Fが書いたお話が「F（彼女の個人名、注）のおはなし」となっているが、皆でやるのだから「Fのおはなし」ではおかしいという話が出た。翌日、Fのものと思われるノートを横に置き、それを見ながら、Gが大きな画用紙

に字を書き写していた。かたわらでFがページを手で開いて押さえながら、Gが書くのを真剣なまなざしで見守っていた。Gが書き写しているのを近づいてよく見ると、Fのノートタイトルの「Fのおはなし」と書かれているが、Gが画用紙に書き写した字を見ると、「ねずみのおはなし」と書かれていた。それは写し間違いではなく、前日の話し合いを受けて、「Fのおはなし」が「ねずみのおはなし」になり、F個人のものが仲間と共有されるにふさわしい形に変えられたのだと考えられる。

ところで、篠原は、詩の暗誦をぜひ取り入れたいと思っていた。子どもたちに提案してみると、Fをはじめとするこの4人の女兒たちがやりたいと言った。話し合いの結果、『さよならさんかく』（安野光雅・作、講談社）の暗誦に挑戦し、ほどなく子どもたちは詩をそらんじることができるようになった。

さて、BとCの希望であった「マッサージ」は当初「おみせ」グループに配置されていたが、二人が異議を唱えたことは先述した。篠原と話し合い、「げきじょう」グループで上演の合間にお客さんたちにマッサージをするということで納得し、「げきじょう」グループに入ったのだが、その後、Bはマッサージでなくお笑いをやりたいと言い出した。篠原は、子どもからの意見を尊重しようと考えたが、マッサージについてはどうするのかなど、BとCの二人と話し合った。その中で、マッサージはそれで人を楽にするもの、お笑いは人を楽しませるもので、二つともつながっているということになり、お笑いを活動として取り入れることになった。この二人に惹かれ、他の男児たちが同調して活動し始めた。

一方、J（男児）は日頃からフラダンスを

踊っていたので、篠原はぜひ彼にそれをしてほしいと伝えた。そして、Jだけでなく、「げきじょう」グループの男児ほとんどがフラダンスを踊ることになった。男児がそろってお笑いとお笑いとフラダンスをやることになったのだが、K（男児）はお笑いとフラダンスはやりたくないと言った。そして、もともと仲のよいL（女児）と組んで「おはようっぽん」というニュース番組をやることになった。Kは、このグループの活動の中で表情がさえなかったが、Lと「おはようっぽん」の台本を書いてから、生き生きと動けるようになった。毎朝、KとLは事務所を訪ねて園長や事務職員の方々に朝食の献立についてインタビューし、それを「きょう、えんちょうせんせいは、あさごはんにごはんとおみそするとたまごやきをたべたそうです」などと園内に放送した。こうしたKの姿に、Kとやや距離のあった同グループの男児たちが関心を持つようになってきた。

その後、Kをのぞいた男児たちが、「だるまさんがころんだ」をやりたいと言い出した。彼らは、普段の遊びをそのままに、お客さんの前で行うことを考えていたようだった。篠原は、「だるまさんがころんだ」「だるまさんが泣いた」「だるまさんがおこった」など、その発言を聞いてジェスチャーをする遊びにアレンジすることを提案した。そして、「だるまさんが」のあとを即興で発言すること、発言に応じて動作をすることを皆でやることになり、見るお客さんも楽しめるものになった。

「げきじょう」グループの中では、テーマごとに分かれて活動していたが、一つ一つの演技を続けて上演することを目標にする段階になって、「げきじょう」グループが一つにまとまる必要が生じ、実際にそのようになって

きた。上演開始を告げる「これからげきじょうをはじめます」という言葉は、M（男児）が自分から言い始めた。カーテンの開け閉めは、HとIがすすんで行くようになった。合唱の前の「これからうたをうたいます」というアナウンスについては、篠原からCに「やってみる？」と尋ねたところ、彼はそれを引き受けた。

こうして「げきじょう」は約30分の一連の演技を流れるように構成できるようになってきた。本番近くなって、担当の篠原が体調を崩し、さんかんび当日にも高熱で欠勤することになってしまった。しかし、子どもたちは活動を把握していて、代理で手伝うことになった廣瀬は、むしろ子どもたちからの指示を受けて動いたという。「だるまさんが……」のゲームでは、子どもたちが4～5人のお母さん方を指名して、お母さん方に参加してもらった。「だるまさんがころんだ」ではお母さん方も子どもたちとともに床にころび、「だるまさんが笑った」では大声で笑い、会場が笑いに包まれた。保護者の方々も、子どもたちの見せ場であると察したときに「おー」と歓声を上げたり、拍手を送ったりして、協力的であった。

#### 【観察者による考察】

観察において印象に残っているのが、かみしばいを作っていた集団の中のFの姿だった。Gだけが鉛筆を持って画用紙に字を書いているのだが、傍らにいるFの真剣さがあまりに強烈な印象を放っていたので、その真剣さの背景を知りたいと思っていた。保育者の聞き取りから、その活動がF主導で始まったことや、Fは日頃からお話を作ることを好んでいたことなどを知った。そうした情報を得てあ

らためてふりかえると、Fは、自分の思うようにGがやってくれるか監視していたようにも思えたし、自分でやってしまえば早いところを、力をあわせてしなくてはいけないからと自分に言い聞かせていたようにも思えた。ともかく、Fはさまざまな葛藤を引き受けながら協同することに取り組んでいたように思う。

また、Fが書いたお話「Fのおはなし」が、Gによって「ねずみのおはなし」に書き換えられていたことも印象深い。確かに、皆でつくる話なのだから、個人名がタイトルに入っているはおかしい。ただ、Fにとっては、心の整理が必要だったのではないかと思えた。

Fは、その「自分のつくったお話をげきにしたい」という当初の発言からわかるように、比較的はっきりとした案をもってこの活動に臨んだ。その後、グループに属して活動しながら、友だちとの関わりの中で譲歩をしたり、保育者から提案を受けたりして、彼女の持っていた案は変化を遂げていったと考えられる。さんかんび当日、すべての演技を終えた子どもたちに混じって、Fの表情は晴れ晴れとし、達成感に満ちていたように見えた。Fは、この行事への取り組みを通して、友達と協同しながら何かを作り上げていくすべを学び、その喜びを知ったと考えられる。

ところで、カラフルな腰みのをつけてフラダンスを踊る男児の集団も、ユニークだった。ときどき、頭にだるまのお面をつけてフラダンスを踊っていて、理由がわからず観察していたのだが、とにかく楽しそうだった。あとで保育者から聞き取りの機会を得て、「だるまさんがころんだ」とフラダンスの二つの活動が前提になっていたとわかった。フラダンスについては、篠原からJに案を投げかけた



いう。子ども自身が自分の特技に気づいていなかったり、子ども自身の中で‘ブーム’が去っていたりすることもあるが、この場合、効果的な助言であったようだ。Jは喜んで篠原の案に同意し、他の子どもたちにもフラダンスが広がっていった。

この子どもたちは、「マッサージ」と「うた」の案から出発し、合唱は実際に実現したが、結果として「マッサージ」は実現しなかった。マッサージをやるはずが、お笑いをやりたいということになり、篠原との話し合いの中で、子どもたちがマッサージとお笑いの意味について考えたというエピソードが印象に残る。マッサージは、それを受けた人の気持ちが楽になるということ、お笑いは相手を楽しませることであって「自分がふざけちゃダメだ」と話し合ったという。篠原はBの心変わりをきっかけとして、活動の意味について考えるよう促した。活動の意味についてじっくりと考えることは、やがて小学校において子どもたちが職業や社会のしくみについて学ぶ姿を彷彿とさせる。そうした活動の基礎として、有意義であった。

グループのほとんどの男児が「お笑い」をやるうとする雰囲気になっていた中で、Kはそこに参加することを拒んだ。「お笑い」はやりたくないと感じながらも、それを拒否することは協同することを拒むことでもあり、後者については後ろめたいものがあったに違いない。Kの中ではせめぎあいがあったのではないかと想像するが、ニュース番組をつくる活動が具体的になっていくことで、彼の表情が生き生きとしてきたという。Kにとって、「お笑い」の男児たちに対する心理的な距離を縮めることは課題であったと考えられるが、自信を持って取り組む活動を得たことで、「お

笑い」の子どもたちへの重かった思いも払拭できたのではないかと理解している。毎朝、園長や他の職員たちは、Kに朝食のメニューについてインタビューされるので、しっかりと朝食を摂るよう心がけることになったという話もほほえましい。担当学年の保育者にとどまらず、園のすべてのスタッフが子どもたちを支えていた。

小さなグループの活動が、やがて有機的に連関し、12人が一つになって「げきじょう」を運営するまでになった。子どもたちが書いたプログラムによれば、「ハワイアンダンス、さよならさんかく、だるまさんがころんだ、おはようにつぼん、りらくすしゅー、ねずみのおはなし、うた(ともだちはいいもんだ)」が順次上演された。行事を終えて、廣瀬は「げきじょうの子どもたちの成長を強く感じる」と語っていた。確かに、一人一人が葛藤を乗り越え、納得を重ね、協同して「げきじょう」を作り上げていた。

#### 4. こだわりを支える保育者の援助—Nの事例から

##### 【概要】

「さんかんぴ」にやりたいことについて子どもたちに発言を促したとき、N(男児)が「やきいも」と言った。彼が発言をしたこと、それ自体が保育者たちにとって驚きであり、大きなできごとだった。幼稚園において、やきいもをする活動をしたことはなく、なぜ彼がそう考えたか、保育者たちはその理由が読めなかった。保育者たちからすれば、予想だにしない発言ではあった。

Nは、普段朝の支度時間に時間がかかり、そのうち座り込んでしまうこともあった。友だちと行動することが少なく、友だちの姿を眺め

ていることが多かった。そんなNが発言をしたこと、それ自体がうれしくて、保育者たちは絶対にその発想を生かしていこうと考えた。園長の石川も、「Nくんが！」と驚き、さつまいもを使った調理をすることになれば、全面的に協力すると話した。

学年を6つに分けて活動することとし、どこに属するか決めているとき、クラスの違うO（男児）が「Nくんとおいもをやる」と発言した。この二人はクラスが同じになったことはなく、行動をとともにすることもなかった。でも、Oの発言によって、Nの案は二人の案になった。

ある朝、Nが新聞紙と何か描いた画用紙を持ってきた。つきぐみの担任である篠原にNが「よういをしてきたよ」と意気揚々とした面持ちで伝えた。画用紙には、クレヨンでやきいもやさん（やきいもやさんがトラックを運転し、おいしそうなやきいもの黄色い中身もみえた）の絵が描いてあった。家でやきいもやさんの絵を描いてそれを持参したり、材料を持ってきたりする姿から、Nが「やきいも」をやることについて意欲を持って過ごしていることがわかった。新聞紙については、本人にその用途が自覚されていたようではなかった。グループの担当である廣瀬は、その新聞紙の使い道を考えた。新聞紙にさつまいも色の絵の具を塗ることを提案し、NとOは二人で紫色の絵の具で新聞紙を塗りつぶした。そして、その塗った新聞紙を使って、中に新聞紙を丸めたものを包み、大きな焼き芋のオブジェを作った。

その後、二人は「レストラン」グループで他の子どもたちと同調して行動した。「レストラン」グループ皆でクッキーを作ったり、エプロンを作ったりするときには、ともに活

動した。ただ、「やきいも」について、NとOは特に先の構想を持っていないようだったので、保育者からスイートポテトを作ることを提案したところ、Nは「やきいも」でなければいやだと答えた。保育者がスイートポテトを提案した理由は、2月の厳寒期に冷めてもおいしいからで、「さんかんび」当日に来訪した保護者にふるまった際、「おいしい」と言ってもらえれば、Nの自信にもつながる。しかし、スイートポテトにしたほうがよいと説得して彼の意欲を萎えさせてはいけないと、園長はやはり「やきいも」を作る方法を考えた。そこで、園長はデパートで高級な銘柄のさつまいもを購入し、わずかだがそれを焼いて少人数の保護者にふるまうことにした。それで、Nの「やきいも」をやりたいという思いは貫徹された。最高級のさつまいもだけあって、冷めてもおいしかったと評判で、Nの母からも「おいしかったです」との報告があった。

一方Oは、「さんかんび」当日、前日に作ったスイートポテトを売り、完売した。その他、レストランでは、子どもたちによる手作りのホットケーキ、クッキー、麦茶を売った。（売り上げは各所への献金とした。）NとOは、早く自分たちの商品売りつくし、そのあとは他の注文の品をお客さんのテーブルに運んだりした。この一連の活動の前には、ともに過ごすことのなかった二人が、すがすがしい面持ちでともに働いていた。

この後、Nはめざましく成長した。3月、ひなまつりの絵を描いて保育者たちを驚かせた。一連の「さんかんび」をめぐる活動を通して、Nは確かに大きく変わったと保育者たちは感じていた。

### 【観察者による考察】

Nが「やきいも」と発言したことは、保育者たちにとってうれしいハプニングのようなものだった。さらに、Nと交友関係がないと思われたOが「Nくんとおいもをやる」と言ったことで、Nは大きな自信を得たことだろう。彼にとっては、保育者に認めてもらうよりもうれいできごとだったのではないかと想像する。一方、Oは、「やきいも」の活動に関心を持ったと考えられるが、Nへの関心があったのかどうかはわからない。ただ、普段親しくない友だちと協同することに抵抗感はなく、やってみることに挑戦することを優先的に考えたということであったのだろう。

Nが「やきいも」をやりたいと発言した日の夕刻、保育者たちはその発言を話題にし、「どうしてやきいもなんだろう」「絶対なんとかしましょう」と口々に明るく語っていた。発言の脈絡が突拍子もないように思えても、彼のその発言を大切に育みたいという決意が共有されていた。先述した「げきじょう」グループのFの場合とは異なり、発言はしてみたものの、活動の確たるプランを持たないのがNであった。それでも、保育者たちは、彼の意欲が低下していくことのないよう、必要があれば活動の提案を積極的に行っていった。そして大人たちから「おいしいね」とお世辞でなく心から言ってもらえることで、彼が大きな自信を得るであろうことを予想し、園長は最高級のさつまいもをデパート地下食品売り場で購入して彼の活動を支えた。子どもには想像もつかない援助ではあるが、卒園を目前にしたこの時期、「おいしいね」と言ってもらって彼が大きな自信を得るための、最大限の援助であった。

5歳児の「協同的な学び」と一言に言って

も、様々な子どもたちがいる。その一人一人の姿をとらえて、一人一人に異なる援助が求められると言えるだろう。ただ、Nにとっては、Oによる歩み寄り（「Nくんとおいもをやる」）こそ、何より彼を成長させるできごとだったのではないか。友だちに自身の発言を評価されたことにより、彼は自身を肯定的にとらえるきっかけになったと考えられる。Oによる発言は保育者に操作することはできないことであるが、協同する舞台装置を設定したことは、こうした関わり合いをもたらす土壌となっていた。

### 5. 他のグループの活動について

さんかんび当日、保護者に圧倒的な好評を博したのは、ゆうびんきょく（2名）であった。これは、宛名と差出人を書いたはがきをポストに投函してもらい、それをゆうびんきょくの担当であるDとEが配達して歩くというものであった。さんかんびに訪れた全員の保護者が、用意されたテーブルといすで自分の子どもに手紙を書いた。DとEは、その77人分を子どもたちに配達して歩いたのであった。DとEは、自分たちを除くすべての子どもたちの所属するグループや活動の出番などを把握していて、例えば「げきじょう」の子どもたちに配達するためには、その上演の合間を縫ってはがきを渡すなどの配慮をしていたという。赤いメグミルクの牛乳パックを使って作った帽子をかぶり、二人は意気揚々と走り回っていた。準備の過程では、1人がかぜをひいて一方は1人で活動しなければならないなど、やや活動の満足度には残念な部分があったが、本番当日に大変な活躍ぶりとなり、すべてを挽回できたと保育者たちは喜んでいった。

一方、ペットショップ（6名）は、活動の最初の頃には、子どもたちは無心に猫や犬を作ったり、柵を作ったりし、作った動物で散歩したりして日々楽しんでいたのだが、さんかんびが近づくにつれて、残念ながら活動内容が停滞していった感がある。ペットショップでは、ペットを貸して散歩を楽しんでもらうことと、ペットを売ることの二つを並行して行うことにしたのだが、下の学年の子どもたちが遊びに来ているときにも混乱をきたしていた。それで本番当日も、ペットの貸し出しと売り出しとが混乱してしまい、子どもたち自身には取捨することができなかった。混乱が生じたときこそ、その解決のために話し合うよい機会であるので、そうした機会を生かせなかったことが残念であった。担当の成川は、巷のペットショップでは、トリミングなどもやっているし、もっとペットショップについて子どもたちとじっくり考える機会を持つべきであったと述べている。保育者は、子どもたちが主体的に活動を進めていけなくなったとき、一参加者として積極的に提案をしていく必要があると言えるだろう。

そのほか、「おしゃれ」グループ（17名）では、ペンダントやゆびわ、ブローチなど、色とりどりの商品が並び、さんかんび当日、子どもたちの「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」との元気な声が飛び交っていた。お母さん方は、売り子になっている子どもたちとの掛け合いを楽しみ、うそのお金を持参してそのお金を払って品物を受け取っていた。

「めいろ」グループ（14名）では、迷路とお化けやしきを統合したようなユニークな空間が完成し、下の学年の子どもたちの人気を博していた。海の生き物や恐竜に関心を持つ子どもたちの思いが大切にされたレイアウト

で、迷路の中は深海のようでもあり、恐竜が住む世界のようにもあった。当日実際に観察者が中を歩いてみると、袋小路に追い込まれたあと、おばけにおどかされた。どうすれば来た人が驚くかを考えて行動する、子どもの思いに気づき、心動かされた。

「ゲーム」（13名）では、ゆうびんきょくの二人を含め、小さなグループが多数集まってそれぞれの持ち場を豊かにする活動を続けてきた。その中の「UFOキャッチャー」では、図画工作の専門家の助言を得ることで、割り箸と輪ゴムを用いた‘キャッチャー’ができ、子どもたちの思いを実現することができた。「まとあて」では、担当の二人（ともに男児）が、まとづくりにおいて、恐竜の絵をひたすら描く役とひたすらそれを切る役とに分かれ、普段はともに活動しない二人の間に互いを生かした連携があった。「サッカー」では、緑の網を用いて作ったゴールの前で、お客さんの蹴るボールをとらえてはりきる子どもたちの姿があった。

#### おわりに

本稿において、行事への準備や行事当日の活動を通して、協同することでもたらされる5歳児の子どもたちの多様な成長（「学び」）の姿や、子どもたちを支える保育者たちの多様な援助について明らかにしてきた。

子どもたちは普段ともに過ごすことのない友だちと、活動の目的を共有することで新たに結びつき、友だち関係を広げていた。これは、4歳児～5歳児前半期のころに築いた親しい友達との関係を基盤とするものであり、5歳児後半期の子どもたちだからこそ達成できた課題であったと考えられる。活動の過程では、友だちとの活動に葛藤を覚えながら活動する

子どもの姿をとらえることもあり、そこでは、その姿を見取ることから始まる保育者の援助が欠かせないものであった。そして、緊張感を乗り越えて、子どもたちは新たな経験をし、力を合わせることの充実感やそれを実現した自分への自信を深めていた。そうしたものを総体として5歳児後半の「協同的な学び」ととらえることができると考えている。

こうした実践記録の公開によって、関係者が5歳児における「協同的な学び」について互いに学びあう一助となると考える。今後も、保育者と観察者（保育者養成校教員）の連携によって、互いの学びに資する作業を行なっていきたい。

（文中、子どもたちには登場順にアルファベットを付した。）

## 注

- 1 岩田純一「協同的な学びの成立」文部科学省教育課程課・幼児教育課編集『初等教育資料』6月号（No.782）東洋館出版社、2004年6月。青柳宏・五十嵐市郎・服部紀子・永松正子「五歳児後半における「協同的な学び」の展開（その1）」宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第28号、2005年4月。五十嵐市郎・青柳宏・服部紀子・永松正子「五歳児後半における「協同的な学び」の展開（その2）」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第28号、2005年4月。青柳宏「人間関係の深まりと協同的な学び」『初等教育資料』7月号（No.797）2005年7月。加藤繁美・秋山麻実・茨城大学教育学部附属幼稚園『5歳児の協同的な学びと対話的保育』ひとなる書房、2005年。シルビアチャード著、小田豊監修、芦田宏監訳、奥野正義・門田理世訳『幼児教育と小学校教育の連続と接続—協同的な学びを生かしたプロジェクト・アプローチ—』光生館、2006年。東京都新宿区立四

谷第三小学校・東京都新宿区立四谷第三幼稚園「幼稚園の協同的な学びから小学校の接続期の指導へ」『初等教育資料』2月号（No.805）東洋館出版社、2006年2月、など。

- 2 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm)
- 3 国立教育政策研究所教育課程研究センター『幼児期から児童期への教育』ひかりのくに株式会社、2005年。
- 4 岩立京子「幼児期の協同的な学びを実現するために」『初等教育資料』10月号（No.813）東洋館出版社、2006年10月。
- 5 この期間中、さんかんびに向けた活動以外にも、多様な活動は行われていた。じっくりとさんかんびのグループ活動に取り組むことができる日（こうした場合は一日のうち持続して2～3時間取り組むことができる）もあったが、日によっては、誕生会、創立記念日のイベント、地域の外国人の方々を招く行事などが入ることもあった。また、週1回は体育の時間とリトミックの時間もあり、こうした日は、合間をみて子どもたちはさんかんびのグループ活動を行っていた。

\* 埼玉学園大学人間学部幼児発達学科

\*\*学校法人雙鳳学園はとり幼稚園